

2003年

第15回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集《第10集》

- 一 「ポツダム宣言」一九四五年七月二十六日
吾等合衆国大統領中華民国政府主席及「グレート・ブリテン」国総理大臣ハ吾等ノ数億ノ国民ヲ代表シ協議ノ上日本国ニ対シ今次ノ戦争ヲ終結スルノ機会ヲ与フルコトニ意見一致セリ
- 二 合衆国英帝国及中華民国ノ巨大ナル陸海空軍ハ西方ヨリ自国ノ陸軍及空軍ニ依ル数倍ノ増強ヲ受ケ日本国ニ対シ最後の打撃ヲ加フルノ態勢ヲ整ヘタリ右軍事力ハ日本国カ抵抗ヲ終止スルニ至ル迄同国ニ対シ戦争ヲ遂行スルノ一切ノ連合国ノ決意ニヨリ支持セラレ居ルモノナリ
- 三 願起セル世界ノ自由ナル人民ノ力ニ対スル「ドイツ」国ノ無益且無意義ナル抵抗ノ結果ハ日本国国民ニ対スル先例ヲ極メテ明白ニ示スモノナリ現在日本国ニ対シ集結シツツアル力ハ抵抗スル「ナチス」ニ対シ適用セラレタル場合ニ於テ「ドイツ」国人民ノ土地産業及生活様式ヲ必然的ニ荒廃ニ帰セシメタル力ニ比シ測リ知レサル程更ニ強大ナルモノナリ吾等ノ決意ニ支持セララル吾等ノ軍事力ノ最高度ノ使用ハ日本国軍隊ノ不可避且完全ナル破壊ヲ意味スヘシ
- 四 無分別ナル打算ニ依リ日本帝国ヲ滅亡ノ淵ニ陥レタル我儘ナル軍国主義的助言者ニ依リ日本国カ引続キ統禦セラルヘキ力又理性ノ経路ヲ日本国カ履ムヘキ力ヲ日本国カ決定スヘキ時期ハ到来セリ
- 五 吾等ノ条件ハ左ノ如シ
吾等ハ右条件ヨリ離脱スルコトナカルヘシ右ニ代ル条件存在セヌ吾等ハ遅延ヲ認ムルヲ得ス
- 六 吾等ハ無責任ナル軍国主義カ世界ヨリ驅逐セラルルニ至ル迄ハ平和安全及正義ノ新秩序カ生シ得サルコトヲ主張スルモノナルヲ以テ日本国国民ヲ欺瞞シ之ヲシテ世界征服ノ挙ニ出ツルノ過誤ヲ犯サシメタル者ノ権力及勢力ハ永久ニ除去セラレサルヘカラス
- 七 右ノ如キ新秩序カ建設セラレ且日本国ノ戦争遂行能力カ破碎セラレタルコトノ確証アルニ至ル迄ハ連合国ノ指定スヘキ日本国領域内ノ諸地点ハ吾等ノ茲ニ支持スル基本的目的ノ達成ヲ確保スル為占領セラルヘシ
- 八 「カイロ」宣言ノ条項ハ履行セラルヘク又日本国ノ主権ハ本州北海道九州及四国並ニ吾等ノ決定スル諸小島ニ局限セラルヘシ ※カイロ宣言末尾且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルヘシ
- 九 吾等ハ日本人ヲ民族トシテ奴隸化セントシ又ハ国民トシテ滅亡セシメントスルノ意図ヲ有スルモノニ非サルモ吾等ノ俘虜ヲ虐待セル者ヲ含ム一切ノ戦争犯罪人ニ対シテハ嚴重ナル処置ヲ加ヘラルヘシ日本国政府ハ日本国民ノ間ニ於ケル民主主義的傾向復活強化ニ対スル一切ノ障礙ヲ除去スヘシ言論宗教及思想ノ自由並ニ基本的人権ヲ尊重ハ確立セラルヘシ
- 十 日本国ハ其ノ経済ヲ支持シ且公正ナル実物賠償ノ取立ヲ可能ナカラシムルカ如キ産業ヲ維持スルコトヲ許サルヘシ但シ日本国ヲシテ戦争ノ為再軍備ヲ為スコトヲ得シムルカ如キ産業ハ此ノ限ニ在ラス右目的ノ為原料ノ入手（其ノ支配トハ之ヲ區別ス）ヲ許サルヘシ
- 十一 前記諸目的カ達成セラレ且日本国国民ノ自由ニ表明セル意思ニ從ヒ平和的傾向ヲ有シ且責任アル政府カ樹立セラルルニ於テハ連合国ノ占領軍ハ直ニ日本国ヨリ撤収セラルヘシ
- 十二 吾等ハ日本国政府カ直ニ全日本国軍隊ノ無条件降伏ヲ宣言シ且右行動ニ於ケル同政府ノ誠意ニ付適當且充分ナル保障ヲ提供センコトヲ同政府ニ対シ要求ス右以外ノ日本国ノ選択ハ迅速且完全ナル破壊アルノミトス

ところ 緑生涯学習センター
月・日 平成15年7月12日
戦争体験を語り継ぐ会実行委員会

◎ 発刊のことば

二〇〇一年九月十一日のアメリカに於ける同時多発テロ以後、アメリカの関わる戦争が続いており、アフガンの次はイラクに侵攻。

一般民衆は死亡者を含め、多くの人々が戦争による被害を受けている。

また、次の標的は、北朝鮮とも言われており、戦争はいつまで続くのかと、地球上の平和を願う人々を心配させている。

人類は昔から愚かな戦争を繰返し、常に弱者が被害に合ってきた。又、戦争へと「有事三法」が成立した。この小冊子を平和へ続く道標としたい。

この世の中から戦争を無くし、人類が平和に暮せる日が来るまで、戦争に反対し続けたいと願っている。

目次

三人の大元帥陛下に翻弄された青春	橋詰 四郎	一頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年 柘植脩一郎	三頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年 岩田真奈美	五頁
戦争はこの世の生き地獄でした	平賀 房子	七頁
戦争と私	片山 清和	九頁
戦争と私の青春	中野 秀雄	十一頁
戦争で抑圧された日常生活	安藤 實禪	十三頁
日本の無条件降伏とイラク戦争	渡辺甲子男	十五頁
敗戦時から戦後についての思い出	匿名 名	十七頁
地獄のシベリアから生還す	吉田 勇雄	十九頁
なぜ私が「生体手術演習」		
をする軍医になったのか	湯浅 謙	二十二頁
掃 除	石河 孝益	二十四頁
戦時歌謡のページは二十五頁にあります		

二人の大元帥に翻弄された青春

橋詰 四郎

◎一人目の大元帥

大元帥陛下の命令で十九歳で軍籍。満州（現中国東北）第六国境守備隊へ派遣された。ここは歩兵十個中隊、砲兵三個中隊。私は、朝水陣地、歩兵二個中隊、砲兵一個中隊に配置され、黒龍江岸の望楼からソ連領を監視していた。

陣地は山腹を掘り、厚さ一メートル五十センチのコンクリートに固められた永久要塞。陣地構築は中国人労働者を使い、完成と同時に機密保持の名目で、家族のいる労働者全員を殺した。これが「五族協和」「東洋平和」「聖戦」の中味である。満州は王道楽土と宣伝し、中身は地獄、日本は東洋の鬼と怖れられていた。守備隊は全員玉碎しても三時間死守せよが、大元帥陛下の至上命令であった。この三時間で南満州の日本軍が戦闘準備をするというのである。八月九日早朝、眼前の黒龍江を渡河しソ連軍が攻撃してきた。砲弾を沖繩へ送り弾丸のない砲兵隊も、対戦車爆雷を抱いて次々と戦車に体当たりして戦死。三時間どころか、降伏するなど命令した大元帥陛下が、十五日に最初に降伏したことも知らず、二十一日までソ連軍と対等に戦い、深夜ソ連陣地に忍び寄りソ連兵のすすり泣く声も聞いた。そこへ手榴弾を投げ逃げ帰ってくるのだ。

二十一日、ソ連軍陣地から白旗を持った将校が徒歩で日本軍陣地に来た。日本が勝ったぞ！万歳！万歳！降伏は大元帥陛下に不忠義だ、家族も村八分になると何人かで武器を持ち離脱し、収穫前の玉蜀黍を食べながら抗戦逃亡兵になったが、捕まりシベリアへ夏服のまま連行された。

◎二人目の大元帥

万物は凍てて二度目の冬も生く

四 郎

二人目の大元帥は名うての悪で、自分のためなら仲間も兄弟でも殺すと云う人物。日本兵をソ連の戦後復興に使うため、シベリアへ連行し背後から銃口で狙わせ強制労働を強要した。シベリアで日本兵を待っていたのは、日本人の誰もが体験したことのない、酷寒・飢餓・重労働・風が媒介する発疹チフスなどの疫病による大量死で、血便を垂れ流し、着替えもなく糞まみれで死んでいった。死ぬと生まれたままの丸裸にさせ、通夜も告別もさせず小屋に積み上げ、トラック一台分になると何処かへ運ぶ。生きている時は、風と南京虫に食われ、死ぬと何処かで野犬か狼に食われるか、白樺の肥やしだ、河に流されたら、蝶鮫に食われキャビアに変身する。

この悪に尻尾を振る日本人が現れた。アクチブである「全世界労働者の命であり、日本人民の最良の友、労働者農民の解放者、偉大なるスターリン大元帥陛下万歳」合わせないと吊るし上げるのだ。大元帥は天皇一人でこりこりだのに。アクチブに時効はないと、まだ探している奴がいる。明日は俺が死ぬ番のシベリアは絶望そのもの。病人の薬もない、今は血が薬だ。献血すると三日間

休まずと言う、血液型を調べる薬もないからO型だけと言う。栄養失調の戦友たちは止める、お前が死ぬぞと警告したが、三日休んで四日目に死ねば、血便を垂れ流さず奇麗な死に方が出来る。日本に帰れた人は、俺の死にざまを母に伝えてくれと頼む。皆明日は我身の沈痛な雰囲気を送り出される。二百CCと思っていたら、ソ連はヨーロッパ圏で倍の四百CC。倍であれば死の計算が更に確実になると思った。奴は岡山市で生きている。戦争が悲惨ならシベリアは地獄だった。献血で死んでいたらシベリア版コルベ神父だったのに。

◎三人目の大元帥

地獄で白樺の肥やし、キャビアにもならず夢に見た祖国に生還すると、日本は三人目の大元帥が仕切る国になっていた。上陸するや机の上に着ていた物を全部脱がせ、スターリン同様生まれのままの姿にさせ、五十メートルほど先の入浴場まで歩かせる。アウシュビッツでガス室に送られるユダヤ人を体験させられる。入浴中に持ち物を全部調べ。極悪人スターリン大元帥もさせなかった屈辱な全裸の行列に抗議すると、マッカーサー大元帥陛下の命令だと言う。これが祖国日本が俺等に対する上陸第一歩の仕打ちか、俺等が帰って来ては日本は迷惑で、いけなかったのかと、くやし涙で更に抗議する。

家に帰ると進駐軍の呼び出し。私の確認方法は特徴を読み上げる「君は橋詰四郎、頭髪は黒、目は茶色、顔に特徴になる黒子（ほくろ）なし、右腕に刀傷あり、間違いはないか」震え上がり戦慄が背筋を走る。四キロメートル以上の行動は申告の厳命を受ける。配達される郵便もハガキは勿論、封書も開封され、文面側一枚一枚に検閲済と濃い紫色のスタンプが、お前を監視しているぞばかり押しであり、判読すらできない。夜遅く帰宅し家に入ろうとすると背後から、橋詰さんですか？と呼ぶ、振り向こうとすると、そのまま前を見ていなしと丁寧な口調で言う。何処へ行ってきましたかと聞く。反抗的な態度をする中国人を日本は痛め尽くしていたので、逆らわずに素直な態度で応対する。世間話を二、三して気がつくと姿を消している。米ソ冷戦の渦中にいるのだ。

俺はいつ解放され、自由な身になれるのか恐怖の毎日。シベリアで消されたロシア人を見てきたが、まさか日本で俺がと影に怯える生活。昭和二十五年、何度目かの呼び出しで出頭する、半袖姿の記憶があるから夏であったと思う。毎回質問にだけ答えていたが、この時は座ると同時に私は叫んでいた。「私はカトリックだ。」正面に座っていた彼は、素早く立ち上がると私を指差しながら「ネームデー」と大声で叫ぶ。私も反射的に立ち上がり、不動の姿勢で「十二月三日フランシスコ・ザベリオ。」と大声で即答する。これを境に郵便物の検閲もなく、尾行もなくなる。後は四キロメートル以上の行動だけだ、テストとばかり無申告で登山や、魚釣り。私から陰がきれいに消えていた。ネームデーが私を解放し、自由の身にしてくれたのだ。

クリスマス耶蘇名を我が家みな持ちて

祖父父母達の太平洋戦争

諸輪中学二年生 柘植脩一郎

◎おばあちゃんの話

おばあちゃんは当時二十歳、名古屋市西区に住んでいた。八人兄弟の上から二番目（長女）だった。母を十七歳で亡くし、母親代わりをしていた。弟たちは学童疎開をしており、小さい妹たちを育てていた。父と兄は戦争に行っていた。おばあちゃんはラジオを組み立てる作業をしており、給料は月十六円。近くの農家の人に、虫に食われお店では売れないような作物を分けてもらったり、配給されるものが食料となっていた。

雑炊や、すいとんなどを水で味を薄めて量を増やして食べていた。白米などは当然口にすることは出来なかった。まだその頃乳児だった妹は、母が死んでしまったため、ミルク代わりにおもゆの上澄みを哺乳瓶に入れて飲ませたらしい。

兵隊さんたちの防空壕は設備が整っていたらしいが、庶民のものは、ただ家の空き地などに、自分たちで穴を掘っただけのもので、とても狭かった。電気は、光が外に漏れないように雨戸をしっかり閉め、電球は一つだけ、そしてその電球にも周りに布のようなものを付けていた。今みたいに部屋全体を明るくするのではなく、物が見えるくらい。あと、電気代を抑えるためと、飛行機にバレないように、なるべく電気をつけなかった。なので早寝早起きという、規則正しい生活をしていた。しかし、いつ空襲が来るのか分からないために眠りは浅かった。

着る服は、防空頭巾を被り、もんぺをはいていた。衣服は毎日洗濯はしないで、何日も同じ服を着ていた。飲料水は近所の人と同じ井戸で、手押しポンプで汲み上げていた。各家庭に水道が無かった為、バケツを持っていつて必要なときに必要なだけ汲み上げていた。ガスはなかった為、薪を焚いて、食事の準備をしたり、お風呂を沸かしたりした。お風呂は一日から三日おきにしか入れず、みんなシラミがわいてしまった。だから、お風呂に入っているときと食事中は幸せだったんだ。僕たちが大平合宿でした体験を毎日するというのは、どれだけ大変なことかよくわかる。

おばあちゃんは、名古屋裁縫所で働くようになった。服などの造り方を教えてもらい、完成した物は松坂屋で売っていた。女子だけしか働いていない。戦争が始まり、裁縫所の先生が焼夷弾の熱で焼死し、裁縫所を辞めなければならなかった。昭和十九年一月二十日に結婚し、諸輪に移り住んだ。そして戦争が

激しくなると、東京や名古屋の都市から親戚や知り合いの人が疎開をして来た。しかし遠くから来る人は、たくさんにもつを持って来る事が出来なかった。その人たちは、家はもちろん、大切な物、思い出もB29の爆弾で燃え、灰になってしまった。

戦争がつづくので物不足になり、お金があっても物が買えなくなり、配給用の切符を添付して買うようになった。配給用の切符は一人につき六十ポイントぐらいで、ポイントと衣類・食料を引き替えることが出来る。結婚するときに着る服も配給切符で引き替えた物である。そんな大変な時期に、高価な服と切符を替えてしまったので、生活はもっと厳しくなった。仕事は百姓をしていたが、農協に渡さねばならないので、米は食えることは出来ず、替わりに配給で、豆・麦を砕いた物や、豆のかす、芋のカンパンなど、調理をしていない物が配られた。百姓の仕事をしていても、米を口にすることは出来なかった。配給制は戦後四年から五年続いた。

その頃の履物はわら草履で、都市に住んでいる人達は作れず、買うのが習慣であったため、その人たちの草履を、米を買うときに残る稲で作ってあげていた。しかし、お店で売られている物とは違い、諸輪からジャスコまでを往復すると、裏が擦れてしまい使えなくなってしまうほどの柔らかな物だったために、毎日一足づつ作っては壊し、作っては壊しの繰り返しだった。百姓をしながら柿の栽培をしていたため、収穫をしたら自転車に五ケースぐらい積み、名古屋までこいでいっては被災者の人達に安く売っていた。だから名古屋が焼け野が原になった情景が今でも頭に浮かぶらしい。復興には二十年ほどしか、かかっていない。そこに、もの凄いい人の努力を忘れてはいけない。名古屋にとって改善されたこともある。それは、道の幅が狭かったのを広くすることが出来たことだ。今の名古屋はそんな風に出来上がった。

戦争が終わり、少したった昭和二十三年に農地法が出され、不在地主で農業をしない地主の土地を借りて、農業をしている小作農に安い値段で売らなければいけなくなった。これは、作物をたくさん作るために当時の政府が考えた案だった。

感想

戦前の日本は不在地主制が発達していた社会で、そこで小作農民は地主から土地を貸与され、その借り賃を米やお金で払っていた。そのため農作物は地主の手に多く集まり、社会には多く流通しない。それを、地主に強制的に土地を手放させ自作農を増やすことで、その制度を変え、より多くの農作物を市場に回そうというものであった。

この調べ学習をして本当に良かったと思う。食べ物の大切さや、戦争の怖さ

など、色々なことが分かった。今のお年よりの方は戦争の他にも、伊勢湾台風など、とても怖くて辛い、貴重な体験をしていることを改めて知った。この地球で人間同士が争いをしなくなるためにはどうすれば良いのだろうかを考えてみた。

①この世の中には百九十余りの国々があるが一つの国にする。

②世界共通の言語を作る。

③宗教の信仰を禁止。

などなどいろんな事を考えつくが、そんな事は無理だよ。でも、世界中の人が仲良くするのは無理ではないはず！。そして、人がやる気になればなんでも出来る、ということがわかったから、これからは何事にも頑張っていきたい！。

祖父母達の太平洋戦争

諸輪中学二年生 岩田真奈美

父から我が子への遺書

父ハ スガタコソミエザルモ イツデモオマエタチヲ見テイル ヨクオカア
サンノイイツケヲ マモツテ オカアサンニ シンパイヲカケナイヨウニ シ
ナサイ ソシテ オオキクナツタラ ジブンノスキナミチニ ススミ リッパ
ナニホンジンニ ナルコトデス ヒトノオトウサンヲ ウラヤンデハイケマセ
ンヨ アナタタチノ オトウサンハ カミサマニナツテ アナタタチヲ ジッ
ト見テイマス アナタタチ フタリナカヨクベンキョウシテ オカアサンノシ
ゴトヲ テツダツテクダサイ オトウサンハ アナタタチフタリノ オウマニ
ハナレマセンガ フタリナカヨクシナサイヨ オトウサンハオオキナジュウバ
クニノツテ テキヲゼンブヤツツケタ ゲンキナヒトデス オトウサンニマケ
ナイヒトニナツテ オトウサンノカタキヲウツテクダサイ 父より

最後の便り（両親への遺書）

父母様

お父さん、お母さん、私も立派な特別攻撃隊員として、出撃することになりました。思えば20有余年の間、父母のお手の中に育ったことを考えると、感激の念で一杯です。全く自分程幸福な生活を過ごした者は他に無いと信じ、このご恩を君と父に返す覚悟です。

あの悠々たる白雲の間を越えて、坦々たる気持ちで私は出撃して征きます。生と死といずれの考えも浮かびません。人は一度は死するもの、悠久の大義に生きる光栄の日は今を残してありません。

父母上様もこの私の為に喜んで下さい。特に母上様には御健康に注意なされお暮らしくださるよう、なお又、皆々様の御繁栄を祈ります。私は靖国神社に居ると共に、何時も父母上様の周囲で幸福を祈りつつ暮らしております。

私は微笑んで征きます。

出撃の日も、そして永遠に。

原爆の惨状

私は当時、満二十六歳で、二・七キロメートル離れた陸軍兵器廠の託児所で被爆しました。被爆直後、周囲が生き地獄の如く大変な惨事になっている様子を見て、生き残った自分はあるたくさんの犠牲者のご冥福を祈りながら供養することと、広島復興ということに自分の命がある限り全力を尽くしたいと誓いました。

それで、今日に至るまで自分のできることを、一生懸命頑張って生かさせてもらっております。特に、あの時に広島全市の被害者の方は死の寸前で『もう何もいらない。水を、水を下さい』ただ、その一言で亡くなっていかれました。その時に一滴の水でも差し上げたかったのですが、原子爆弾というすごい爆弾の中には毒ガスがまざっているから広島全市が毒ガスに冒されている水なので、一滴ものませたらいけない、と皆さんから強く反対されましたので私は一滴の水も差し上げることもできませんでした。その後、私どもがお水の飲めることを知りまして一緒に飲んでいただきたい。飲める水ができたんだということで方々の山々へは自然の水、いいお水を選んで供養させていただいております。この供養の気持ちはどうぞ子孫に伝わり、永遠に子供たちも一緒に供養を続けていただきたいと、そののみ願っております。

突然に広島の上空から一発の爆弾が落とされて、本当に不意打ちだったものですから、なにもとりあえず、その瞬間にうつぶせたり、そして逃げ惑ったりしましたが、私はその瞬間吹き飛ばされたかどうか、用事をしていたところよりかなり離れた所にうつぶせて真っ暗でございました。ふと気がついて自分は託児所の子供のおやつを作ろうとジャガイモをゆでていた時で、火を焚いておりましたので、その火を早く消しておかなきゃ、一番に託児所が火事になるという恐怖を感じ、そのあたりをさがして起き上がって見ましたが、火はすっかり消えておりました。鍋も無く、ジャガイモも無く、もうそこらじゅうは散々たる惨事で、子供は？子供は？と探したら、子供も室内から道路の方へ吹き飛ばされて、命の限り大声で「おかあちゃん、おかあちゃん、おかあちゃん」と走り回っておりましたので、私は思わず子供の寝ていた布団をひたたくって子供の泣き声の方に走り、これはどうしたことだと悲惨な騒ぎになりました。私も、親と共に子供と共にそこらじゅうを右往左往と走り回りましたが、朝、

連れてこられた子供と親がバッチり合わないの、足りない子供をまた尋ねまわりました。そして裏手の山にありました防空壕の方へ走ってきた被爆者の方だろうと思います。みんな焼け爛れて人間の相が変わっておりました。

焼けぶくれ、そしてあのぶら下がった皮膚。ものも言えないようでした。あなたは誰？どこから来たの？どうしてそうなったの？そのあたりを尋ねまわりましたが、その人たちは私の声はわかった様子ですが、聞こえた様子ですが、ものが言えませんでした。ただおろおろと「み、みず、みず」と叫んでおられたのですが、私にはそれが通じませんでした。そして子供をまた捜し始めると大きなジュエスチャーで何か私に訴えられておりました。止まってよくよく聞いたら「水が欲しい」という一念のみなさんの様子がわかりました。

反省

えつと……ゴメンナサイ！近所にお年よりは住んでいなく、自分の祖父母はボケて言葉が出なく……聞けませんでした。なのでパソコンで調べました。スマセシー！

感想

もう絶対に繰り返して欲しくない！いろんなサイトをまわっていたら、全部きちんと長く自分の体験談が書いてありました。それに何年も前の事をそこまですっかり覚えていてるって事は、それだけひどく心に残っているんだなあ。

そこらじゅうに転がる死体、水を求める人、焼け爛れた皮膚をぶら下げながら歩く人……今でも他の国ではこういう事が実際に起こっているんだよね。親子が離れるのは当たり前、心から水を欲しがっている人に、目の前に川が流れていても一滴もあげることの出来ないもどかしさ。こんな思いをしても、まだ戦争が続いている……信じられませんか。少しでも多くの方が戦争の恐ろしさを学び、考え、そして少しでもこの悲惨な惨状を繰り返さないよう、この気持ちを忘れないようにしたいと思います。

戦争はこの世の生き地獄でした

平賀 房子

昭和十二年七月七日、楽しい七夕祭りの日に支那事変勃発。私が小学四年生の夏のことです。皇軍天皇陛下の日本軍は上海、南京を陥落させ、私達は戦勝気分には酔い昼は旗行列、夜は提灯行列をして喜んでおりました。

その内に日本帝国は、聖戦と美名を使い満州や中国から南太平洋方面迄戦場を広げ、大東亜戦争と名を変え村の若者や一家の大黒柱にも赤紙「召集令状」が来て出征。後に残されたのは、女、子ども、老人、病人だけ、言葉では語り

尽せない悲惨な状態でした。

小学四年の私を頭に五人の子どもを残し、父も召集令状で戦争に行き、母が野良仕事が出来ぬので、私が三歳の弟を、小学二年の妹が二カ月の妹をおぶって、三軒ぐらい離れた小学校へ、教科書とオムツを持ち、霜柱の道を素足で通いました。藁で草履を作ってくれる父親がいなくなったので、言葉では現わせない辛さ悲しさ。その内に生活用品も乏しくなり、米・麦など穀物は種を残し強制供出させられ、食べ物配給制度になり、主食はサツマイモ、ジャガイモ、カボチャや団子汁でした。配給だけでは足らず、食べられるものは草や木の実など何んでも食べました。今の食べ物を粗末に扱うテレビを見ると心が痛みます。また軍馬の飼料の干草も雑草を刈って供出しました。

「欲しがりません勝つまでは」を合い言葉に勤労奉仕で、出征兵士の家の田畑の草取りや手入れに動員され、護国神社建造に子どもも動員されモッコで砂や土を運び、大人に負けぬほど一生懸命働きました。日本が勝つことを信じて出征兵士は村外れの峠まで小学校の生徒全員で軍歌を歌って送りました。国のため天皇陛下のためにと、妻子を残し出征していく本人の気持ちは如何ばかりだったことか……。その内村にも戦死者も増え、小学校でまとめて村葬が行なわれました。戦死者の骨壺には骨でなく小石が入っていたと聞きました。

戦争が長引き激しくなり、B29の空襲で日本本土も戦場になり、朝昼晩に関係なく空襲の度にサイレンが鳴り響き、その度に防空壕へ避難し、敵機の去るのを息を殺して待ちました。村ではアメリカ兵が上陸して来たら竹槍で突き殺す訓練を受け、家に火が付いたら竹竿の先に縄を結びつけた道具で叩き消すことを教わりました。この頃には、米軍の攻撃で沖繩はアメリカに占領され、鹿児島島の知覧基地から若者達が特攻隊となり、敵艦、敵機の爆撃に行き帰ってくる飛行機はありませんでした。今も知覧基地には、たくさんの特攻隊員の遺品や遺詠の詩歌が残され、心情を察し断腸の思いです。この事実を後世に伝え風化させないで下さい。

町の小学生は戦災を避けるために田舎の小学校やお寺等へ集団疎開し、大変難儀したと聞きました。市内在住の人達も、知人を頼り村の山奥へ小屋を建て住んでおりました。村の近くに四十五連隊の基地があり、鹿児島本線が近くを通り、艦砲射撃とB29の爆撃や艦載機の機銃掃射の的になりました。その度に地球が木端微塵に砕けたかと思う大音響を体験しました。終戦間近かには昼夜を問わず空爆と機銃掃射の繰り返し、生きた気持ちはありませんでした。

米軍の艦載機は胴体に大きく日の丸を画き、日本機の日の丸は一回り小さく一目で敵味方が区別でき、頭の上で日の丸同士の飛行機が空中戦を繰り返したことをこの前接骨院で話したら、戦争を知らぬ若者に凄く怒られ、二度と口に

すまいと思っていました。が、この事実を世間に知って貰いたいと書きました。八月に入り増々爆撃も激しくラジオ・新聞も無く、六日に広島原爆投下も十五日の日本の降伏も口伝でに聞き「米軍が村外れまで来た逃げろ」と言われ、食べ物を持てるだけ持って山奥へ逃げ、夜遅く村へ様子を见に行った人が、米軍は来ずデマだったと教えてくれてホッとしました。

終戦と同時に外地の兵隊、民間人の引揚げが始まり、戦災孤児も焼け跡に屯し、闇市が大繁盛。衛生面は全く顧みられず、蚤・虱が大発生。伝染病と食料難や栄養失調でたくさんの方が死にました。それでも生き残った人は焦土の中で一生懸命働き、現在の繁栄の基礎を築いたのです。戦争に行かなかった少女の私も、戦争のために生き地獄を体験させられました。この悲惨さを風化させないで後世の人に語り伝えて下さい。今の「平和と自由」は戦争で死んだ尊い命と引換えられたと思って下さい。戦争犠牲者の冥福を祈り「命こそ宝」と、この世に生を受けたことを喜び、一度きりの人生、日々是好日と生きたいものです。

アメリカのイラク攻撃を憂慮し、一日も早い平和の来るのを願いつつ……。

戦争と私

片山 清和

◎戦争時代

十五年戦争という言い方は満州事変から。日華事変（日中戦争）からは十年大東亜戦争（太平洋戦争・第二次世界大戦）となって四年間、昭和前半は戦争続きの日本だった。一九四五（昭和二十年）八月十五日、無条件降伏の敗戦日この日、日本の天地は青く暑かった。

世界恐慌一九二九（昭和四年）生まれの私は、学徒動員のトラックの横でこの敗戦日を迎え十六歳になっていた。昭和一桁と云う一九三〇年前後生まれは、年長者は徴兵・学徒出陣や志願によって外地（戦場）へ、私達は学徒動員で工場や農地拡大の開墾や農家へ。国民学校（小学校）児童は疎開で田舎へ分散である。兵士にならない父親らは軍需工場へ徴用され、母親は老人・幼児を家庭で守る。前線の戦地、戦後の内地と全力をあげての総力戦となっていく。

◎物資不足（食の場合）

太平洋戦争が始まった昭和十六年十二月八日に六年生は名古屋城見学だった。帰校後担任から開戦を聞く。それ以前から、米・調味料は配給制度になり、生活への切迫感は少しづつ高まり、外米（ナンキン米）細長く臭くて不味い）の臭みを消しながら、醤油で味を付けたり麦飯に工夫する。年令により米の配給

量に差があり、戦争末期に米の配給量が更に少なくなると、さつまいも、大根飯、雑炊、水団（すいとん）団子汁の代用食が増え、さつまいも、大根も食べた。

我が家は借地ながらも三百坪の畑があり、素人百姓で野菜類、小麦、じゃがいも、さつまいもなどを肥料は人糞で一生懸命育てた。農家が農地に使う肥料は人糞で、農家は非農家の人糞を野菜などと交換で集める契約権を確保していた。トイレはポットン式で水洗普及は戦後である。

農家でない家庭は食料難で困ったが、我が家は農地があったので野菜類などは自給自足で困らなかった。近くの高射砲陣地の兵隊が我が家の野菜を盗むのである、さつまいもを大量に盗まれた時は悔しかったが泣き寝入りである。兵隊も食べ物がなく空腹で、農地荒らしをするほど食料難になっていた。

◎物資不足（衣の場合）

衣料品も点数制になった。服やパンツもシャツも点数切符がないと買えなくなった。タオル、靴下、ハンカチも、繊維は今のようには丈夫でなく「スフ」という人造絹糸（パルプ原料による化学繊維）。スフのシャツは水に弱く、強く絞ると破れ、背中の汗に張り付くと裂けやすい。靴下は指先やかかどが破れたら継ぎ当てで修理する。母はミシンで五月蟻の鍾馭旗を解体し蒲団カバーやパンツ、シャツを縫ってくれた。運動靴は一年一足で底に穴が開くとボール紙を敷いた。家で下駄、草履、藁草履を作った。戦争が終わっても物資不足は続き、昭和二十四年就職したときの服装は学生服であった。修学旅行や宿に泊まる人は米を持っていかないと泊めてもらえないのである。夜行列車は三人掛けで通路に新聞紙を敷いて座る人や寝る人で、靴を脱ぎ通路の人を踏まないようにした。列車の本数も車両の数も少なく大混雑が普通の状態であった。

◎住むところ

当時、名古屋市北区志賀町は二百余戸の集落で、田畑の間に神社、寺院を囲んでいた。その西端三棟に三百羽の鶏を飼育する養鶏業が我が家である。父の収入を助ける母、祖母、長男の私らが鶏の世話をしながら畑仕事をする。昭和十九年夏から二男と長女は母の実家へ縁故疎開する。物資不足は家畜の飼料にも及び鶏も飼えなくなり、鶏小屋を解体し防空壕の材料にする。防空壕は五十センチ掘り地上は五十センチ、板で囲み掘った土を上に乗せ完成。直撃弾を受けたら全滅する防空壕だが、我が家は防空壕を造る場所も材料があり幸運な方であった。四人が腰を屈めて入り膝をかかえてしゃがみ込む。ラジオ、ミシンの頭部、米を持ち込む。

◎空から招かざる客

防空壕を造ったあと学徒動員で徴発され家を出た。昭和十九年十二月十三日の名古屋初空襲は、監視棟からB29の編隊を眺め、爆弾が機体から離れ午後

の太陽に光りながら落ちていくのを見た。二回目は昭和二十年一月三日、刈谷で学徒動員で行った農場から宿舎の寺へ帰る道、黒いススが風に乗って流れ落ちてきた。三月二十四日深夜の空襲は宿舎で、真昼以上に照らす照明弾の明るさに驚いた。五月十四日の朝の空襲はB29四百八十機の大編隊で、名古屋を火の海にし名古屋城と我が家も炎上させられた。

動員先の大府から燃えている名古屋を歩いて昼過ぎ我が家に辿り着いた時、我が家は焼け跡のくすぶりだけ、乳母車に全財産を山盛りにした母がいた。

二歳の四男をおぶった弟が逃げ延びた西の畑から戻ってきて家族全員の無事を確かめあった。

次の動員先は中村区、豊国神社の森でヒューと爆弾の落下音、反射的に近くトラックの下に滑り込むと同時に、ドドンと腹に響く、爆風と一緒に砂や小石が体中に刺さるように当る。砂煙が風に流されて視界が広がると、怪我人に肩を貸した人が鳥居をくぐって池の方へ行く。参道の赤大鳥居へ向かうと、荷馬車の馬が足を折られ血を流して倒れ、爆風で飛ばされたバスが電柱にぶつかっていた。私の怪我はトラックの下に滑り込んだ時の鼻の擦り傷だけだった。

戦争と私の青春

中野 秀雄

昭和十四年七月、当時国民の三大義務であった教育・納税・兵役の義務により、二十歳で徴兵検査。男子のシンボルをぐっと握られ、尻をポンと叩き、よっしゃ甲種合格。当時、身体障害者か病弱者以外は殆ど合格でした。

昭和十五年四月四日歓呼の声に送られ、氏神様で組長さん、阿野駅（現豊明駅）で村内九名の仲間と一緒に村長さんの祝辞を受け、桜花爛漫の名古屋城廓陸軍歩兵第六聯隊へ入隊しました。駅まで送りに来て下さった人達は羽織袴に下駄履きこれが当時の礼装でした。軍隊に入ってから終戦までの五年間に、一緒に入った九名の内、六名が戦死、生きて帰ったのは三人。その内二名も既に故人、生き残っているのは私一人になりました。

入隊と同時にこの世の生き地獄が始まりました。起床から消灯（就寝）迄、ぎっしりのスケジュール、考え事をする暇などありません。藁布団に敷布、毛布一枚づつの寝床。朝、起床喇叭で顔を洗う暇もなく使役に出よ、掃除に出よ、飯上げ、配膳後片づけ、午前の演習、昼食準備と後片づけ。午後の演習、帰れば編上靴の手入れ、靴底に少しでも土が残っていると、手入れが悪いと顔が変形するほど殴られる。洗濯、学科、精神訓話と、食事は金（カネ）の茶碗に金（カネ）の箸。一汁一菜一膳飯。麦飯に味噌汁をぶっかけて流し込む。遅い奴にはビンタが飛ぶ。

夕食が済み消灯（就寝）迄の間も初年兵はスケジュールが一杯休む暇もない。が、ここから地獄の本番が始まるのである。食事が終わると決まって初年兵整列があり、古兵が昼間の演習の事、内務班での態度、兵器の手入れ、整理整頓などで何かと言いがかりをつけ、歯を食い縛れと叫ぶと片っ端しから拳骨で往復ビンタ。一日でも早く軍隊に入っておれば古兵と呼ばれ殴る権利がある。殴る理由は何でもよいのだ、自分が殴られたから殴り返しているそれだけだが、私達初年兵より古い兵隊は全部上官で、天皇陛下と同じだから、天皇陛下から理由もなく因縁を付けて殴る、殴られるこれが軍隊であった。

一番嫌なのは、寝るまでにびっしり仕事があるのに、ああでもない、こうでもないと言々と説教して全員ビンタ、早く叩いて、早く終わってほしい。初年兵より体力のない古兵が顔を真赤にして一人で大勢を殴るから、直ぐハアハアと息切れしているから面白いが、古兵は天皇と同じだから笑えないし直立不動の姿勢で殴られるのである。よろめたり動いたりするとまた殴る。

腹が減って腹が減って仕方なく、夜こっそりと班長の残したご飯に水を掛けすすり込んだことも幾度か、これも班長が初年兵のためにわざと残してくれていた。

入隊後八十日目に豊橋の高師ヶ原で一期の検閲が終わり、陸軍習志野学校へ十名の同年兵と昭和十五年七月一日入校。この学校は国際法で使用禁止兵器であるイペリット、ルイサイトなどの糜烂性毒ガス、その他の毒性兵器を研究開発する日本国内にも世界にも秘密学校であった。各種の砲弾、爆弾の中に入れて発射する中隊。山岳戦で馬の背中で運び、大きな如露のような散水器で手で撒く中隊。私は散水車のような車両中隊で、厚いゴムの上着にゴムのズボン、ゴム手袋にゴムの長靴を履き、防毒マスクを被って車両散布する。

想像して下さい、日本の高温多湿の夏に全身、顔もゴムで覆っているのです。真っ先に毒ガスでなく毒ガスを撒く訓練で発病入院の羽目。今のうちに良い薬もなく、技術の低い衛生兵が何本も注射針を折りながらのカルシウム、ザルプロの注射。病気を知らせたと言って、兄弟従兄弟からの見舞いの手紙は目の前で破られ、母から栄養のあるものを食べよと送られたお金は、強制貯金をさせられ、原因不明の高熱の白衣の体を思い切り殴られた。

病棟では夜が明ける度に、昨夜は誰が死んだ。あれが死んだとひそひそ話。茶屋の煙を眺めて明日は我が身かと嘆く毎日でした。

入院二カ月、全快しないまま退院命令。学校に帰っても足が地に付かず体のだるい。宮城県玉城寺ヶ原の出張演習も不参加。ある日残っている病弱兵は国鉄（現JR）津田沼駅で貨車に軍用車輛積み込み作業に出され、私は極度のふ

らつきと頭痛で屈んでいると、下士官から貴様初年兵のくせに要領が良いと婦女子の前で倒れるほど殴られ、半分死にかけました。

昭和十五年十月二十一日東京代々木練兵場で行なわれた、紀元二千六百年記念大観兵式に私も歩兵部隊として参加した。観兵式は皇軍の最高司令長官大元帥陛下の臨席を賜り、このため新宿の歓楽街に一週間滞在し、一日一回、分列行進の練習に行くだけで後は休息宿泊。若い女の子に兵隊さん兵隊さんと持て囃されて、束の間の極楽でした。

どの将校も決まったように貴様等は消耗品だ、一銭五厘の葉書一枚で集められる。馬より劣ると馬鹿にされたものです。兵隊の楽しみは休日外出、特に外泊は垂涎の的でした。昭和十五年に一度二泊三日の外泊休暇は、風の糸が切れたように帰郷し、久し振りに布団の中で手足を伸ばし、これが娑婆の空気だと心行くまで吸ったものです。東京駅大時計の下で偶然にも別の部隊に入隊した同級生に合う、奴は上等兵の三つ星で私より偉くなっていた。夢にまで見た憧れの三つ星の進級命令は最後までなく、オケラ一等兵の二つ星で軍国主義日本の帝国軍人の下級兵士のまま敗戦を迎えた。成績がよく進級した者の多くは青春の真っ只中、恋愛も知らずに死んでいった。

生き残っている辛さは皆さんには理解出来ないと思う。死んでいった戦友への鎮魂の文と読んで頂けたら、私の思いが皆さんに少しは伝わるかも。

戦争で抑圧された日常生活

安藤 實禪

私は戦場へ行かなかったが、戦中戦後体験したことを各項目毎に概要を記述することにした。

◎出征兵士の見送り続く

昭和十二年七月支那事変勃発。当時私は小学校五年生（岐阜県加茂郡白川町）村人が召集され出征する人が増えてきた、出発の時は村中で見送り、約四軒を徒歩で高山線白川口駅まで、集落の人達や小学生で見送ることが日常化していた。出征兵士の家族・肉親は悲しみを言えぬ時代で辛い思いだったと想像する。私達小学生は出征があると授業を休み、軍歌を歌いながら駅まで行進した。やがて、戦死し遺骨となって帰ってくる人が増え「英霊の凱旋」と言って駅まで遺骨のお迎えに動員された。

◎食料事情

支那事変（日中戦争）から昭和十六年十二月八日の太平洋戦争に入ると、国

民の食料事情は一段と悪化してきた。昭和十六年の夏頃から店でのパンの自由販売はなくなった。主食の米は自由に何時でも好きな時に必要な量が買えたのに、戦争が長引き激しくなり米穀通帳が世帯毎に渡され、食べれる米の量が決められた配給制度が実施された。決められた量は少なく配給と同時に、米農家以外は食料不足の毎日だった。だから主食にいろいろな雑穀類を入れた雑炊が日常の食事だった。国鉄名古屋駅で販売する駅弁がサツマ芋の代用食。地方によっては玄米の駅弁が売られていた記憶がある。どこも米が無いので旅館に宿泊するにも米を持参し出すことになり、修学旅行も二泊三日なら七食分の米を持参した。

食料不足は全国同じでなく地域毎の特色が反映させられていた。地域によって味噌・醤油が数ヶ月も遅配だったり、私の故郷の岐阜県では塩の配給が無く、蒲郡まで海水を汲みに行った記憶がある。現在では理解できにくいことだと思う。食料難は国民生活を一層苦しい状況へ追いやり、隣近所の人間関係に悪影響を及ぼした。非農家は農家を捜して買い出しにでかけた。その時、農家へはお礼品を渡さないと売ってもらえないようになっていた。農家の子が小学一年生になると聞くと、ランドセルや学生服、靴などを持っていく、娘が嫁に行くのと知ると、自分の花嫁衣装を持っていき農家に心証を良くしてやっとなが米が買えた。そして新しい言葉、新語が出来た「筒生活」非農家は家族の衣類を筒のようになが一枚一枚脱いで農家に渡し食料を手に入れていた。親戚の農家でそうした品物を見せて貰った時、腹立たしさと怒りは今も忘れない。山村の人達も米不足で、山村で生産する木炭を土産として、農家から食料品を手に入れていた。食料の配給は、主食の米一日二合三勺。味噌・醤油・塩・砂糖・野菜類・煙草一日六本。マッチも配給制になり、今は自動点火でマッチなど使わない生活になっているが、当時ライターは無く。全部マッチ点火するので、火打ち石を使う人もいた。もう原始生活になっていたのだ。

◎衣料切符

衣料切符は年齢、性別、職種に関係なく一人、一年間の持ち点、都市部は百点、郡部は八十点になる。これで衣料不足が解消とは誰も思わない。食料が不足して配給制になったように、衣料も同じように点数制になり、点数が無いと買うことが出来なくなった。靴下など直ぐ破れ穴が開き、電球を靴下の中に入れた針仕事で修理をした。修理する糸十匁一点。靴下も一点。手拭い・タオル三点。半袖シャツ六点。長袖シャツ十二点。背広五十点。着物四十点。小学生服十七点。パンツ・パンティ四点。衣料品から布団、座布団、毛糸、作業服、毛布等繊維製品は全部切符制になり、国民生活を増々圧迫し、生理用品は完全に姿を消し布団綿で凌ぎ、銃後の女性に屈辱感を与えた。

一方、アメリカ軍の勢力が強くなると空襲を警戒し、灯火管制が実施され電

灯は黒い布で覆い光が外へ漏れないようにし、街灯も姿を消し暗黒の町と化した。二十年八月十五日敗戦日の夜の明るさで、生きていた喜びを噛み締めたことは今も忘れられない。

私の職場にいた同僚が、大きなビルは防空のため黒く塗りつぶされているという内容の手紙を、戦地の友人に出したが、その手紙が戻されて来て、軍が私信を検閲していると知り、何も言えず書けぬ恐怖の時代になったと覚悟した。

戦争が激しくなるにつれ、人々の心の中や考えを取り締まるようになってきた。戦争遂行に少しでも疑問を持った話をするに「特高警察」に連行された。学生や中等学校生徒に対しては「教護連盟」というのが組織され、学生達の生活態度に厳しい目を光らせていた。車内で腰掛けている学生に対し、席を立つように命令したりした。逆らうことは絶対にできなかった。学生の憲兵のような恐い存在だった。

昭和十九年十二月頃から本土への空爆は激しくなってきた。その頃私は国鉄に勤務していた。蒸気機関車は黒く塗られカムフラージュされて走っていた。また名古屋駅の屋上に対空機関銃が設置されたが、一万メートル上空を飛ぶB29には弾丸が届かず役立たなかったようだ。

鉄道は兵員輸送や軍事物資輸送の動脈だった。軍事秘密の列車ダイヤもあった。浜松、静岡、清水を通過する列車は、アメリカの潜水艦に砲撃される心配もあり、無蓋車に応戦する大砲を積んだ「列車砲」という専用車も考えられていた。

昭和二十年三月の名古屋大空襲の頃、私は岐阜県の山村で病氣療養中だったが、都会から親戚をたどり避難疎開してくる人が日増しに多くなってきた。山村にも食糧はなく山菜まで取り尽くされた。食料も医薬品もなく、体力のない人と乳幼児や子どもが、生きるためにたどり着いた疎開先で死んでいった。奥さんが空襲の傷が悪化し死亡したというのもあった。

◎まとめ

以上、断片的に戦中戦後の事実の一部分を書いたが、まだ多くの思い出がある。現在、平和・自由・飽食の時代で有難い良き時代だと言っても、若い人達にピンとこないと思う。日本が恵まれた経済大国に発展した陰には、アジアで二千万人、日本で三百十万人、アメリカなど連合国で六万人の戦争で死んだ人々がいたことを忘れないでほしい。特に若い世代の人々に知って頂けることを切望する。

日本の無条件降伏とイラク戦争

渡辺 甲子男

終戦の昭和二十年八月十五日から、私達は心をさ迷わせる虚脱状態に陥った。信じられないことと教えこまれてきた神州日本が、無条件降伏を現実化して、食うにも事欠き、追いつめられたドン底生活を、勝つためにはほとんどの日本人が強制されながら、これから先はどうなるのか、考えようによっては、終戦前後の不自由で、贅沢とはまったく無縁で食うや食わずのころが、その時代としては、最も公平に近い世の中だったのかも知れない。

空襲警報のサイレンが鳴る。われわれ兵隊より大切な軍馬の待避である。兵営外の松林に馬、共々に駆け込む作業である。敵機は悠々と部隊の上空を飛んで行く、名古屋近郊の部隊だけに、名古屋空襲と同時に昼夜の別なく敵機来襲の対戦と、空腹の軍隊勤務に明け暮れていたのである。

やがてはアメリカ軍が上陸し、それと戦闘を交えることは必至と思われ、私、あの出征出発の氏神様の神前で、こんど会う時は九段の神前でと、町の皆さんに挨拶したように、やはり戦闘激化により、生きて帰ることはないと言悟をしていたのが、この戦争が天皇陛下の詔勅でピタリと終わった。私は無事、復員でき家に帰れたことはまったく夢のようであった。にも拘らず残念なことに、私たちの部隊長は、その日に自決された。

八月十五日のラジオ放送のお声が聞きとれず、やがては事実が明らかになると、とたんに兵営内の空気は一変した。夜になると至る処で上官や古兵などの酒宴が開かれて歌声が兵舎一杯に響き渡る。その時は終戦を喜んでいいるのではないが、職業軍人とか古参兵などはやけになっているようであった。要するに、急に自由になったので即、できることがしたいことを、先ず、したいということであろう。自分が生きるためにボロを着ていても、また、食べるものが貧しくとも、家庭があつて家族と一緒にあるならば、むごい戦争からのホットした解放感、実は、悲喜こもごもをもった感無量の気持ちでもあった。

そして、戦争中の私の丁稚奉公や徴用・軍隊生活の「何が何でも勝つまでは」と全エネルギーは一体、意味があつたのだろうか、それともいたずらに歳月を送り、その成果の跡形は？。それは明らかにボツダム宣言を無条件降伏として受け取り、結果として、総て無抵抗に許諾してしまった態度が、それから五十八年経った今日、当時の混迷を「後世に誇るに足る、品位ある見事な降伏」と見做し、それをなし得た終戦の「天皇陛下のお言葉を、私たち国民が冷静な態度でおうけした」からこそ、今日の繁栄を築き得たと、現代の日本を、私は、とくに評価したいのである。

戦中・戦後の私たちは、食器一杯の代用食（米以外の蔬菜が多い）に空腹を抱えきれず、食べられるモノはなんでもあさっていた姿を未だ忘れない。そして軍需工場に徴用され、また軍隊に召集されてきたそれらの人々の中には、会社の社長たちもいたが、訓練の激しさと空腹に悩まされる徴用や軍隊生活に入

って、見栄も外聞も構ってはいられない時代を、いやというほど体験を耐え抜かれた人は数多くであると思う。

また、戦災孤児の生活苦や追いつめられた浮浪者の食べものの奪い合いなど、日本の終戦前後の食糧危機を味わったが、未だに海外諸国の食べるにモノなく餓死した動物や瘦せさらばえた子どもたちの近況を知らされると、胸が痛くなるほどの悲劇であることを痛感するのである。そして地球のあちこちでは、身を護ることだけが精一杯の険しい戦火の中を夥しく避難民の群れが、右往左往しながらの光景を毎日のようにブラウン管から見るのであるが、丁度、五十八年前の日本が戦争終結と同時に、食糧事情は一層悪化、むしろ爆発的なインフレの進行中によって、一般大衆の日常生活は一段と惨めなものとなった。

以上のような戦争を体験した私たち日本人には、二度と戦争をしてはならない。他国では民族と国家の破壊戦略を挑んでいる。日本人として至極残念である。一方、真っ只中のイラク戦争は米英の圧倒的な軍事力を見せつけ、しかも短期間でフセイン政権打倒を果たしたことで、国連の関与をも許さない一強支配体制は決定的となったが、強大な軍事力で他国政権の生殺与奪を握るような一国主義的な振る舞いは、国際社会にとって容易には受け入れがたいのも確かである。

米国が軍事力で親米国家をつくろうとすればするほど、新たな反米感情を生む。その悪循環のつけは、いずれ払わなければならないだろう。そして戦争の結果が社会に与える影響の大きさは、誤用すれば、勝者がかえって敗者よりも危険の位置に陥るの恐れがある。米国がなお独善的な一国主義や官軍意識で突き進めば、解放者としての偶像もいつか引き倒されかねない。イラクなどの民主化という目的以前に、人道支援や治安維持が急務である。真の戦いは始まったばかりである。

敗戦時から戦後についての思い出

匿名

昭和二十年五月、私は神奈川県川崎市に住んでいた。旧制中学四年生だった。動員学徒として、昼間は軍需工場で働くと共に、アメリカ軍が上陸してきた時は、木の上から爆弾を抱えて敵戦車の前に飛び込む自爆攻撃訓練や、竹槍でアメリカ兵を刺し殺す訓練を受けていた。

その頃の日本は沖縄もアメリカ軍に占領され、本土決戦、国民一億玉碎が叫ばれて、制海権はアメリカ軍に握られ、輸送船は日本を出港して外洋に出ると、直ぐアメリカの潜水艦に撃沈されるほどになっていた。制空権はとくにアメリカ軍に渡り、日本全土が爆撃され、東京は連日の空襲で毎夜空が明るく燃え

ていた。

あの夜も、また空襲警報が鳴ったので、東京が空襲されると思っていたところ、突然近くに焼夷弾が落ちてきて、パチパチと家が燃え始めた。荷物を持ち出す余裕もなく、火の粉除けに、布団一枚を頭からかぶって近くの空地に逃げた。空を見上げると、編隊を組んだ数十機ものB29爆撃機からドラム缶のような大きなものが、次々と落とされ、それが途中ではじけて筒状になった焼夷弾がバラバラと降りそそいできた。

焼夷弾は地面に落ちると、ベトベトした油脂が燃えながら四方に飛び散り、家屋などにベタッと付いてアッと言う間に周囲を火の海にしてしまった。布団を頭からかぶり、「どうか焼夷弾が当たりませんように」と、ひたすら神仏の助けを祈ってB29の飛び去るのを待ったが、数十機が一度に来るのではなく、縦に並んでくる波状攻撃だからたまったものではない。

朝になって周囲を見回すと、真っ黒に焼け焦げた死体が、丸太棒のようにあちらこちらに横たわっていた。その中には、昨日まで親しく挨拶を交わしていた知人もいた。よく助かったものだ、私達家族は、その幸運をしみじみと感じ、命さえあればよい、何も無くてもよいと語り合った。昨日まで住んでいた家は夜のうちに燃えてしまい、燃え残った柱などがくすぶっていた。

腹が空いてきても食べ物が無い。近所の人が、馬小屋で馬が焼け死んでいるから、その肉を食べようと言ひ出し、肉を取りに行くことになった。刃物は焼けて無いので、焼け残って欠けた茶碗を持って、みんなで死んだ馬の回りに集まり、欠けた茶碗で肉を削ぎ取って、ブリキ板の上にのせ、焼いて食べた。

暫くして多摩川の土手に掘られた防空壕の穴の中で数日を過ごした後、横浜で焼け残った親類の家に身を寄せた。その後も、B29による空襲が毎日のように続き、家や工場が焼かれていった。日本軍の戦闘機がB29に体当たり攻撃しても、B29は少しぐらっとするだけで墜落せず、戦闘機だけが舞うように落ちてきた。

ある日、空襲を受けた後の街を歩いていたら、直撃弾を受けて破壊されている防空壕から新品の革靴を履いて、死んだ男性の足が二本とび出していた。それが、三、四時間後にそこを通った時には、革靴だけが無くなっているのには驚いた。誰かが持っていたのだ、焼け死んだ馬の肉を削ぎ取って食べたり、死んだ人の靴を持って使って使ったりすることができると、戦争によって人々の心はすさんでいたのだ。

やがて、八月十五日の敗戦を迎え、アメリカ進駐軍が現れた。ジープに乗って街中を走るアメリカ兵に向かって子ども達は「ギブミーチョコレート」と叫んで、チョコレートやクッキーをねだったり、投げてくれるのを奪い合った。

アメリカ兵は、食パンの耳も捨てたので、その耳も奪い合いだった。配給になる食料品は僅かで、米の遅配六十日と新聞は報じている。米の配給が六十日

もないのだ。いつも空腹つづきの毎日、玄米が配給になれば、一升瓶に入れ、細い棒で根気よくつつきを繰り返し、表面の皮を取り除いて、粥にして食べた。道端の柔らかい雑草も茹でてよく食べた。農家へ買い出しに行つて得た大根だけで腹を満たした時もあった。さつま芋などは、そのまま蒸して食べたのでは勿体ないと、なるべく多く水を加え煮て、どろどろにして食べた。

デパートでは、糠の中に入っている砕け米の量によって、糠を一等糠、二等糠、三等糠に分けて売っていた。白土も売っていた。白土は栄養分は皆無だが、腹の足しになり、そのまま便として出るというのだった。

闇市では、米軍キャンプから出た残飯を、大きな鍋に入れ、味噌を加えて煮たのを売っていた。アメリカ兵が食べ残した肉片や、野菜、果物、その種など、いろいろなものが入っており、甘酸っぱいような、しょっぱいような変な臭いと味がした。気持ちの悪いものだったが、よく煮込んであるから大丈夫だと言う売手の誘いに乗って、買って食べたが腹痛は起こさなかった。

その内に栄養失調になり、皮と骨だけに痩せ細り、肋骨が浮き出て、下腹が異様に膨らみ、さながら地獄絵に画かれている餓鬼そっくりの体になってしまった。すいとんや、いも、脱脂大豆、南京米、南瓜など何でも口に入るものは食べた。戦中戦後の飢餓地獄で餓死者が大勢出たが、私はどうやら生き抜くことができた。当時を思い出すと、今の日本は、まさに極楽だ。

地獄のシベリアから生還す

吉田 勇雄

満州（現中国東北）でソ連軍の捕虜になった。それまで食事はキチンと食べていたが、捕虜になった途端満足の食事は与えられず飢餓食になり、鳥目患者が増え全員栄養失調になった。ソ連は日本兵を千名単位で貨車に乗せ、トウキョウダモイ（東京⇨日本へ帰れる）と東寧からシベリア鉄道に入った。大連か釜山から帰せば簡単なのに、何故ソ連領のウラジオストクから帰すのか誰も疑はなかった。ウラジオオなら東へ走るのに、来る日も来る日も西へ走り、帰れる帰れないと意見が別れ険悪な空気になる。初年兵の私達は比較的落ち着いていたが、妻子のいる補充兵の落胆はストレートに体力に影響し、その儘無気力になり貨車の中で数名が死亡した。

三百六十度地平線の真っ只中で降ろされ、ハバロフスクの近くだと教えられ、自動小銃を持ったソ連兵が手真似で早くしろと叫び、隊列を組み三百グラムの黒パンで十日ほど歩かされた。気温は氷点下三十五度。夏服の満州からアツと言う間に厳冬のシベリアの荒野で凍死者が出る。歩けず道端に倒れ野垂れ死にする者もいる。捕虜になってから着替えも入浴もない、全員極度の栄養失

調者が夜は土に寝て、昼は野垂れ死にしないように必死で歩く、さながら幽霊の行列である。それでもソ連兵はトウキョウダモイと言う。テルマの町を通りモシカの町にある収容所に十月中旬入り、ここでベストラー、ベストラー（早く早く）とソ連兵に銃口を向けられ、三年もタダ働きをさせられた。

栄養失調の瘦せ衰えた体の生き血を吸う悪魔に全員取り付かれてしまった。虱である。衣服は勿論、縫目には無数に卵を生みつけ、米粒大に血を吸って膨らんでいる。虱による発疹チフスが蔓延し血便を垂れ流し、着替えもなく糞まみれで死んでいく。死ぬと全裸にされ小屋に積み上げトラック一台分になると何処かへ運んでいく。通夜も告別もさせない。もう人間扱いでないのだ。

銃口に狙われての強制労働は「死の伐採」であった。聴診器もない医者の前に全裸で立つ、尻の肉を掴み一級から三級に振り分ける。屠所に行く家畜と同じだ。三級は軽作業で四級はオーカーと呼ぶ病人。ノルマ王国だから医者もノルマがある。医者の方ノルマは働く人を増やすことだから、三級者は二級に格上げされ犠牲者が三級者に集中し始めた。

伐採は三人一組で氷点下四十度の森林に入り松、樅の木を鋸・斧・ハンマーを使って切り倒すのである。雪の中で足場は悪く、寒さと空腹で動きが緩慢になり、倒れてきた木に跳ねられる。鼻、耳、手足が凍傷になるなど死傷者も多数出るようになった。樅の木には海苔に似た苔が生えていて、誰かがこれは茸と同じだから食べれると言って、苔の多い樅の木を選んで伐採し苔を食べて飢えをしのいだ。出征兵士の家では陰膳を供え無事を祈っているが、この地獄には届かないのだと諦める。戦友が死んでも悲しみもせず、早く楽になったと思うだけだ。食事は満州の人民、家畜の穀物を、戦利品として捕虜に運ばせた家畜の餌を、塩なしで粥状にとろとろに煮てあり飯盒の蓋に半分目。黒パンは二百五十〜三百五十グラムがノルマに依じて配られる仕組みだ。

復員後調べたらソ連が家畜の餌まで持って行ったので、満州では敗戦の冬、大勢の餓死者が出たことを知った。

捕虜になっても軍隊組織のまま、初年兵の私はたまったものではない。軍隊は何年いても後が来ないと初年兵である、上官や先輩兵は天皇の代理で、世話をする仕組みだ。逆らうものなら見せしめ刑で古兵から袋叩きにされた。殴ることで軍隊の非人間組織を維持してきたのである。

補充兵や体力のない者から次々死んでいった。私等初年兵は若いので生き延びているのだ。その私も高熱と下痢で入院。食べていなのに一晩に二十数回便所に通い血便になった。何人も見てきた発疹チフスかと覚悟をする。病人食も戦利品の高粱・粟・燕麦の粥やスープなので受け付けず、隣の兵に食べて貰った。食べた兵は食べれるなら働けと退院させられ、すぐ再入院してきたが死亡した。四国出身の人で医者のお診診というより、医者の方ノルマに殺されたも同然だ。

頭と大腸に熱があり喉が渴き、窓の外には捨てるほど雪があり、雪を食べた
い誘惑にかられるが、雪を食べると死ぬと禁止されていたが、高熱に負け食べ
て死ぬ者もいた。人間、運、不運は何処にあるのか解からない、私は良くして
くれたソ連軍医少佐スミルノアさんが、ソ連で貴重品であった粉ミルクを湯
で溶かし飲まして看護してくれたのです。回復し大腸の熱も取れると雪など食
べたいと思わなくなっていた。

このようにして大勢死んだ最初の冬を生き延び退院しました。シベリアに遅
い春が来ると、食料事情が少し良くなりノルマの増減食も廃止になり、少し人
間扱いの食事になりました。それと同時に収容所内で民主化運動が活発になり、
軍隊の階級制度がなくなったのです。上等兵殿、班長殿、中隊長殿と呼んで敬
礼していたのが、〇〇さんと呼び、私も吉田さんと呼ばれ敬礼なしです。

民主化が活発になりアクチブが台頭し、帝国主義に加担した者を吊るし上げ
る。前職が先生なら教え子を軍国主義者にした。公務員なら人民を、会社、工
場の班長以上は、部下を搾取したと吊るし上げる。将校や警察官、憲兵はいつ
吊るし上げられるかと怯え。その内、軍国主義者で兵隊を理由もなく殴ったり、
ソ連や中国を誹謗していた将校が吊るし上げの急先鋒に変身し、アクチブ同士
でソ連側への密告合戦に発展する。

民主化運動のスローガンは「我々を財閥、軍閥、地主から解放してくれた偉
大な指導者、同志スターリン大元帥のために、天皇島に敵前上陸したら代々木
へ行き、天皇帝打倒に参加しよう」「理論武装をして日本再上陸しよう」「アジ
やデモに積極的に参加しないと吊るし上げられ、軍隊制度より始末が悪く日本
人同士で罵り合い、裏切り合い、ソ連側に密告逮捕させ人民の敵とスターリン
憲法で罰するのだ。アクチブに白樺の肥やしにしてやると罵られ、平成十五年
の今もアクチブに時効なしと捜している人がいる。

昭和二十三年十月頃、体調不良になり三級（軽作業Ⅱ）収容所の便所は池のよ
うに大穴を掘り、板を並べ一度に何人でもできる。冬に凍るのでバールで崩し
捨てに行くのも軽作業Ⅱになった。少しはロシア語も覚え度胸も付いていたの
で収容所内の軽作業を適当にしていたら、なんと四級のオーカーとダモイ（日
本へ帰れる）と言うのだ。十一月五日ナホトカに着き一週間ほどで高砂丸に乗
船するも、また送り返されるかと半信半疑。舞鶴の松の緑と日本家屋の屋根瓦
の黒光りを船上から見たとき、日本を出て六年振りに本当に帰って来たのだと
自然に涙が出た。

昭和二十三年十一月二十日名古屋駅に降り立った。名古屋は昭和二十年三月
十日の大空襲で全滅したと教えられていた通り、ホームから見える名古屋市は
一面の焼け野が原になっていた。家族は無事だろうかと心配しながら改札を出
たら「お兄ちゃん」と一番下の妹が泣きながら飛びついてきた。父も弟も迎え
にきていて、空襲で破壊され未だ復興もされていない瓦礫の円頓寺を、歩いて

我が家に着き、涙で待っていた母親に迎え入れられた。家族全員無事だと喜ぶと、もう一人の妹は結核で薬もなく、一カ月前に死んでいた。僅か一カ月前にだ。無念。

なぜ私が「生体手術演習」 をする軍医になったのか

《七回、十四人の中国人を生体解剖しました》

湯浅 謙

私は、一九四二年（昭和十七年）二十六歳の時、中国へ軍医中尉で出征し、得意満々で自信にあふれていた「大東亜戦争だ、アジアを開放して、しかも、日本が指導して中国人民を独立させるんだ。それに反対する中国人もいるから、これは排除しなくてはならん」と、盲信していた。裸足の子が多くいて「哀れな民よ」と、ふと人間的な気持ちも起こる。私は帝国軍人の将校だ「だから戦争には勝たねばならない」と、人間は変わってしまう。

病院は、軍医十人、看護婦、下士官、兵を入れ百人ぐらいで、戦場で中国人を殺し、反撃され負傷した日本兵を治療していた「俺は正しいことをしているんだ、大和民族は優秀なんだ、天皇陛下の始めた戦争は必ず勝つ」と、私が歩くとき中国人は道をあけ、私はそれを見据え堂々と歩き、軍医の職と地位を得意に考え、しかも当然と受け入れ振舞うようになっていた。開業医の父の後を継ぎ、病に苦しむ無医村と考えさあ実行とした処へ、不意に現役軍医に召集され、軍隊という非社会集団の偉い一員になり、私はいつか傲慢になっていた。

赴任して一カ月半頃、院長軍医から「今日一時から手術演習をやる」と、言い渡された。学生時代、戦地から帰ってきた先輩軍医から、生体実験の話を聞いた時は「薄気味悪い」と思ったが、その時がきたのだ。手術演習は、前線で緊急手術ができるように、技術習得のために軍が計画的に実施していた。戦線が拡大し輸送距離が長くなるにつれ、負傷兵を後方護送せず前線で緊急手術できる外科技術が必要としていた。

「材料」は、生身の健康な中国人で、憲兵隊や警備隊が供給源であった。十二坪ほどの解剖室に手術台が二台、師団軍医部部长・院長軍医・指導外科軍医二名・助手軍医三〜四名・衛生兵数名に教育参加の部隊付き軍医七〜八名が揃って談笑していた。執刀する私は「非人間的行為で許せない」とは考えもせず動揺していた。「今から生きた人間を、そのまま手術するのだ。皆の前で臆病な振舞はするな」と、今迄に手掛けてきた解剖手術例を思い出し、自分を励ましていた。

「材料」は二人、一人は背が高く頬が広くガッチリした体格の若い男性で、落ち着いた様子で下を向いていた。もう一人は年配の農民風で、縛られた両手を前に突き出し「アイヤー、アイヤー」と悲鳴をあげながら室内を見回していた。院長の「始め」の命令で解剖室はシーンとなり、私は極度に興奮した。

背の高い男は、促されるまま手術台に乗った。農民風の男は私の前に立って促しても、手で押しても後退りをし私の目の前に来る。私は「冷静」と思われたく彼を両手で前に突き出した。彼は諦めたように頭をうなだれ手術台に向かった。私は「やったー！将校の名誉を保った！」と、自己満足した。

看護婦が二人に「麻酔薬給不痛睡覚」（麻酔をするから痛くないから寝なさい）と、言う、二人はうなずきながら手術台に臥した。

行程は、腰椎麻酔から全身麻酔に入ろうとした。その時、私は「アッ、消毒」と叫んだ。すると先任軍医が「どうせ殺すんだから」と、笑い返された。虫垂切除、発病でないため腫脹が見られずに探すのに困難し、三回も腸壁を切開した。腸管縫合、四肢切断から気管切開と進んだ。ふと負傷した腕と思い、右前腕切術を練習し一時間半ほどで「手術演習」は終了した。

後始末は私達新米軍医と衛生兵で行なった。農民風の男は死んでいた。「材料」の練習体は、衛生兵がすでに掘られた穴に放り込んだ。この付近一帯は何回も行なわれた「手術演習」の遺体が埋められていた。

背の高い男はまだ生きていた。生き埋めは気が引けるので、心臓注射を試みた。一端血液を吸い上げて針が心臓に達しているか確認したあと、空気を注入した。が、呼吸は停止しない。私は衛生兵に教えられ、全身麻酔に使ったクロールエチール液を静脈に注入し呼吸を停止させた。

これが、私が家を離れて僅か一カ月半後に最初に犯した戦争犯罪なのだ。この二人は何をしたというのか？、故郷は？、家族は？、姓名は？、何も知らない判らないのだ。以後、私はこの任地で六回十人の「手術演習」に関与した。

最初は、おそろおそろに。二回目は大胆に。三回目からは自ら進んで「手術演習」未経験者には「実物がよい、度胸もつくから」と発言するまでになっていた。日本の製薬会社から注文もあり、皮質ホルモン研究用に、脳の皮質を剥ぎ取って、アルコール瓶詰めにして内地に送ったこともある。

私は都市の監獄へ行くよう命令を受けた。監獄には陸軍病院や野戦病院から四十名の軍医が集められていた。軍医部長が「今日はいいい体験をさせてやる」と言、監獄内の手術室に移動した。室内には目隠しされ後ろ手に縛られた男が二人いた、軍医部長の「弾丸を抜くまでは生かしておくように」が合図だったのか、突然拳銃が二発づつ二人の腹に打ち込まれた。私達十人一組で手術台に乗せ、麻酔も酸素吸入もなく、強心剤も止血剤もなく、さながら最前線の戦闘場面を彷彿させる状況下で、弾丸摘出手術を演習した。弾丸は摘出したが悶絶のうちに絶命し、更に四発の発射音がして、別の組が「手術演習」した。

私は、自分の戦争犯罪を告白することで、戦争をなくし平和を守ってほしいと願っている。私一人の調査には限度があり、全貌が掴めないが、それでも「手術演習」生体実験に関与した軍医・衛生兵・看護婦・製薬会社等、数千人になると思う。だが、その多くがこの事実を語ろうとしない。自らの行為を恥じてか？ あるいは恐れてなのか？ あえて避けているのか？ 口にはしない。信じられないと思うが、語ろうとしない人の言い分もある「仕方がなかった」「命令されたから」「あのような時代だった」「皆もやっていたから」「各地でもやっていた」……だから、たいしたことではなかった。と。

この言い訳の言葉が戦争肯定に繋がっていると信じて貰いたい。

※湯浅氏は昭和二十年敗戦後もご自分の意志で中国に残り、内科医として中国人民の保健衛生医療のために働く。昭和二十六年、中国人に対する残虐行為で戦犯として拘置。自分が関与した「手術演習」を包み隠さず坦白（告白）。意外にも担当官はよく告白したと誉め、裁判にはかけられず昭和三十一年起訴免除になり帰国。平成三年と五年の二回、中国の病院跡を訪ね謝罪鎮魂墓参等、日中友好に尽しておられる。

掃除

掃除

石河 孝益

目が覚めると台所から、母のまな板音が気持ちよく聞こえてきた。もう朝だ……。私も起きなくては……。まだ薄暗い六時頃のこと。姉たちも着替えをして、居間でははたきをかけ、掃き出している。急いで土間と、表と裏庭の掃除にとりかかる。昭和二十年四月。末っ子の私が小学校にあがる日から決められた朝の仕事だった。

父はすでに亡く、三人の兄たちは戦場へ。母娘四人の生活は各々分担した、家事手伝いが一日中ある。六歳にして使命感に燃えていた。百坪近い表庭は半分以上菜園だったが、屋敷の北西部には楓・銀杏・椿・山茶花・白木蓮・団栗の太木が北風をさえぎるように立っている。一年中、落ち葉と除草に励んだ。夏休み中は、早朝の涼しいうちに、冬は午後の陽だまりの中で、子どもでも一日のスケジュールを工夫して、自分の役目をきちとやりとげた。

十歳になるとこの家でも、男子は父親代りの仕事を、女子は母親と同じ心意気で、家事と弟や妹の世話をしていた。厳しかった母が、めったに誉めてくれるわけではないが、自分自身きれいになった庭を眺め、季節の花や実を鑑みて満足した。朝のうちにやり残した掃除は、下校後、直ぐに続きをやり終えねばならない。からっ風の吹く季節は、続きというより始め以上に落ち葉の山だった。

直ぐ右前は、同じ年の洋子ちゃんの家である。彼女は長女で弟妹のお守をす

るだけで、自宅庭や路上でいつも、石蹴りや陣取り、お手玉遊びに余念がない。二十歳頃「洋子ちゃんが羨ましかったわ」「孝益ちゃんはお姉さんのお下り（衣類や持ち物）がいっぱいあって、子守りしなくていいし、いいなあ……て思ってたよ」と言う。彼女の家は元気なおばあちゃんと、若いお母さんの二人で、家事の殆どはこなせたのである。

先日の新聞記事

体格は大人の十五歳、空虚な目が、アルバイトの時は一転していきいきと輝きだすのは事実である。優しく保護し教育をうけさせる大人の心遣いが、かえって若者を不幸にしているのだろうか。

（日経・五月七日・東大・西垣通氏）

便利なこの世は、少々体力低下も気にせず暮らせる時代だ。若い子等の手も借りず、個々に辛くとも、元気に生きている老人たちが多い。戦後の復興に尽くした先輩たちのエネルギーは、我が息子たちもふくめて、現代の若者たちには、到底、真似のできないように思えてならない。

歌詞ページ

大きな古時計 二六頁

お山の杉の子・勝利の日まで 二七頁

嗚呼神風特別攻撃隊・空の神兵・ああ紅の血は燃ゆる・
戦友の遺骨を抱いて 二八頁

父よあなたは強かった・兵隊さんありがとう・出征兵士を送る歌 二九頁

戦陣訓の歌・チンライ節・大陸行進曲・愛馬行進曲 三〇頁

欲しがりません勝までは・軍国子守歌・軍国の母・皇国の母・
海ゆかば 三一頁

さとうきび畑 三二頁

大きな古時計

日本語詞 保富 庚午

大きなのっぽの古時計 おじいさんの時計

百年いつも動いていた 御自慢の時計さ

おじいさんのうまれた朝に 買ってきた時計さ

今はもう動かない その時計

百年休まずにチクタクチクタク

おじいさんと一緒にチクタクチクタク

今はもう動かない その時計

何でも知ってる古時計 おじいさんの時計

きれいな花嫁やってきた その日も動いてた

うれしいことも悲しいことも みな知ってる時計さ

今はもう動かない その時計

百年休まずにチクタクチクタク

おじいさんと一緒にチクタクチクタク

今はもう動かない その時計

うれしいことも悲しいことも みな知ってる時計さ

今はもう動かない その時計

まよなかにベルが鳴った おじいさんの時計

おわかれの時がきたのを みんなに教えたのさ

天国へのぼるおじいさん 時計ともおわかれ

今はもう動かない その時計

百年休まずにチクタクチクタク

おじいさんと一緒にチクタクチクタク

今はもう動かない その時計

今はもう動かない その時計

◎お山の杉の子

一 むかしむかし そのむかし
椎の木ばやしの すぐそばに
小さなお山があったとさ

あったとさ

まるまる坊主のはげ山は
いつでもみんなの 笑いもの
これこれ杉の子 起きなさい
お日さまにここに 声かけた

声かけた

二 ひふみよ いむな
一イ二ウ三イ四オ 五ツ六ウ七ア

ちか 三ふ ちか
八日 九日 十日たち

によつきり芽が出る 山の上

山の上

小さな杉の子 顔出して
ハイハイお日さま こんにちは

これを眺めた 椎の木は

アッハッハの アッハッハと大笑い

大笑い

三 こんなチビ助 なんになる

びっくりぎょうてん 杉の子は

おもわずお首を ひっこめた

ひっこめた

ひっこめながらも 考えた

なんでまけるか いまにみる

大きくなって 国のため

お役に立って 見せます

見せます

五 大きな杉は なんになる

兵隊さんをはこぶ船

傷痕の勇士の 寝るお家

寝るお家

本箱 お机 下駄 足駄
おいしいお弁当 たべるはし

鉛筆 筆入 そのほかに

たのしや まだまだ 役に立つ

役に立つ

六 さあさまけるな 杉の子に

勇士の遺児なら なおつよい

からだをきたえ がんばって

がんばって

いまにりっぱな 兵隊さん

忠義 孝行 ひとすじに

お日さま出る 神の国

この日本を 守りましょう

守りましょう

◎勝利の日まで

一 空にはためく あの日の丸を

仰ぎ眺める 我らの瞳

いつかあふるる 感謝の涙

燃えて来る来る 心の炎

我らはみんな 力の限り

勝利の日まで 勝利の日まで

二 山で斧ふる 翁の腕も

海の若者 櫓を漕ぐ腕も

町の工場の 乙女の指も

今日も来る来る お国のために

我らはみんな 力の限り

勝利の日まで 勝利の日まで

◎嗚呼神風特別攻撃隊

一 無念の齒がみ こらえつつ

待ちに待ちたる 決戦ぞ

今こそ敵を 屠らんと

奮い起ちたる 若桜

二 この一戦に 勝たざれば

祖国の行くて いかならん

撃滅せよの 命うけし

神風特別攻撃隊

三 送るも征くも 今生の

判れと知れど ほほえみて
爆音高く 基地をける

ああ神驚の 肉弾行

神風特別攻撃隊

◎空の神兵

一 藍より蒼き大空に 大空に

たちまち開く 百千の

真白き薔薇の 花模様

見よ落下傘 空に降り

見よ落下傘 空を征く

見よ落下傘 空を征く

二 世紀の華よ 落下傘落下傘

その純白に 赤き血を

捧げて悔いぬ 大和魂

この青空も 敵の空

この山河も 敵の陣

この山河も 敵の陣

神風特別攻撃隊に多くの学生が使われました。

◎ああ紅の血は燃ゆる

一 花も薔の 若桜

五尺の命 ひっさげて

国の大事に 殉ずるは

我ら学徒の 面目ぞ

ああ紅の 血は燃ゆる

三 君は歟とれ 我は槌

戦う道に 二つなし

国の使命を とぐるこそ

我ら学徒の 本分ぞ

ああ紅の 血は燃ゆる

◎戦友の遺骨を抱いて

一 一番のりを やるんだと

力んで死んだ 戦友の

遺骨を抱いて 今入る

シンガポールの街の朝

四 友よ見てくれ あの屈いだ

マラッカ海の 十字星

夜を日についだ 進撃に

君と眺めた あの星を

日本はシンガポールを攻め落として
日本の領土に「昭南島」と呼びました。

学徒動員の歌です
学生を兵隊にしたり、工場や農家で働かせました。

◎父よあなたは強かった

一 父よあなたは 強かった

兜も焦がす 炎熱を

敵の屍と ともに寝て

泥水すすり 草を噛み

荒れた山河を 幾千里

よくこそ撃って 下さった

二 夫よあなたは 強かった

骨まで凍る 酷寒を

背もとどかぬ クリークに

三日も浸って いたとやら

十日も喰べずに いたとやら

よくこそ勝って 下さった

三 兄よ弟よ ありがとう

弾丸も機雷も 濁流も

夜を日に進む 軍艦旗

名も荒鷲の 羽搏きに

残る敵機の 影もなし

四 よくこそ遂げて 下さった

友よわが子よ ありがとう

誉の傷の もものがたり

あの日、の戦に 散った子も

今日は九段の 桜花
よくこそ咲いて 下さった

◎兵隊さんありがとう

一 肩をならべて 兄さんと

今日も学校へ 行けるのは

兵隊さんのおかげです

お国のために 戦った

二 夕べ楽しい ご飯とき

家内そろつて 語るのも

兵隊さんのおかげです

お国のために 傷ついた

三 淋しいけれど 母さまと

今日もまどかに 眠るのも

兵隊さんのおかげです

お国のために 戦死した

◎出征兵士を送る歌

一 わが大君に 召されたる

生命映えある 朝ぼらけ

讃えて送る 一億の

歓呼は高く 天を衝く

いざ征け強兵 日本男児

◎戦陣訓の歌

- 一 日本男児と 生れ来て
戦の場に 立つからは
名をこそ惜しめ 武士よ
散るべき時に 清く散り
皇国に薫れ 桜花
五条の訓 畏みて
戦野に屍 曝すこそ
武人の覚悟 昔より
一髪土に 残さずも
誓に何の 悔もある

◎チンライ節

- 一 手品ヤルアル みな来るヨロシ
うまくいこなら かわいがっておくれ
娘ナカナカ きれいきれいアルヨ
チンライ チンライ
チンライ チンライ チンライライ
刀なんぞは 不要 不要アルヨ
ケンカよくない 麦蒔くヨロシ
チャイナ ナカナカ 広い広いアルヨ
チンライ チンライ
チンライ チンライ チンライライ
手品ウマイアル ヨクミルヨロシ
娘きれいアル 見惚れるヨロシ
ウマク ゆこなら 耳環買ってオクレ
チンライ……以下同じ

◎大陸行進曲

- 一 呼べよ日本 一億の
生命あふれる 足音に
地平も揺れよ 大陸の
すべてのものは いま朝だ

- 二 きのうよ父が また兄が
勝鬨あげた 大陸に
これから清い 美しい
大和桜を 咲かすのだ
感謝に燃える 万歳を
送れ輝く 日の丸に
四億の民と 睦まじく
君が代歌う 日は今だ

◎愛馬行進曲

- 一 ぬしは召されて 皇国の勇士
わたしや銃後の 花嫁御寮
ぬしの形見の かわいい黒馬に
秣刈りましょう 飼餌も煮ましょう
雨の露営へ 弾薬積んで
朱に染まって 来た馬見たら
みんな泣いたと 戦地の便り
黒馬も早よなれ 名譽の馬に

◎欲しがりません勝つまでは

- 一 どんなに短い鉛筆も
どんなに小さい紙きれも
むだにしないで使います
そうです僕たち私たち
欲しがりません勝つまでは

二 靴や洋服あたらしく

つくることより役にたつ
強い体をつくります
そうです銃後も戦地です
欲しがりません勝つまでは

三 これは戦車に飛行機に

これはお船をつくるため
みんなそろつて貯金です
そうです心ひきしめて
欲しがりません勝つまでは

四 北に南につぎつぎと

あがる日の丸かちどきに
負けずおとらず進みます
そうです日本の子どもなら
欲しがりません勝つまでは

◎軍国子守唄

一 ぼうや泣かずに ねんねしな

とうさん強い 兵隊さん
その子がなんで 泣きましよう

泣きはしませぬ遠い満州の お月さま

二 ぼうや大きく なつたらば

兵隊さんで 出征して

かあさん送りに いったなら

汽車の窓から 汽車のまどから

笑って失敬するでしょね

◎軍国の母

- 一 ころおきなく 国のため
めいよの戦死 たのむぞと
なみだもみせず はげまして
わが子をおくる 朝の駅

二 散れよ若木の さくら花

男と生まれ 戦場に
銃剣執るも 大君のため
日本男子の 本懐ぞ

三 生きて帰ると 思うなよ

白木の柩が 届いたら
でかした我が子 あつぱれと
お前を母は ほめてやる

◎皇国の母

一 歓呼の声や 旗の波

あとは頼むの あの声よ
これが最後の 戦地の便り
今日も遠くで ラッパの音

三 ご無事のお帰り 待ちますと

言えばあなたは 雄々しくも
今度あうのは 来年四月

靖国神社の 花の下

四 東洋平和の ためならば

なんで泣きましよう 国のため
散ったあなたの形見の坊や
きつと立派に 育てます

◎

海ゆかば 水漬くかばね
山ゆかば 草むすかばね
大君の辺にこそ死なめ
かえりみはせじ

※印だけ歌って下さい

さとうきび畑

作詞・作曲 寺島 尚彦

← ※ざわわ ざわわ ざわわ
ひろい さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

今日もみわたすかぎりに
みどりのなみがうねる
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
ひろい さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

むかし 海のむこうから
いくさが やつてきた
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
ひろい さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

あの日 鉄の雨にうたれ
父は 死んでいった
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
ひろい さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

そして私の生まれた日に
いくさのおわりがきた
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
ひろい さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

風の音にとぎれて消える
母の 子守の歌
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
ひろい さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

← 知らないはずの父の手に
だかれた ゆめをみる
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
ひろい さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

父の声を さがしながら
だどる 畑の なみち
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
ひろい さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

お父さんでよんでみたい
お父さん どこにいるの
このまま みどりの波に
おぼれて しまいそう
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
けれど さとうきび畑は
※ざわわ とおりぬけるだけ
風が

今日も みわたすかぎり
みどりの 波がうねる
夏の 日さしのなかで

※ざわわ ざわわ ざわわ
忘れられない 悲しみが
※ざわわ ざわわ ざわわ
波のように おしよせる

風よ 悲しみの 歌を
海に かえして ほしい

※ざわわ ざわわ ざわわ
風に 涙は かわいても

※ざわわ ざわわ ざわわ
この悲しみは 消えない

編集後記

★ 本記録集発刊にあたり、十二名の諸兄弟姉より貴重な体験記をお寄せいただき有難うございました。

★ 今年は東郷町諸輪中学生の協力を頂きました。四十三名の生徒諸君が祖父母やパソコンで調べたのを、二名を記録集に、三名が語部になって下さいました。体験者が消滅に向かう中「語り継いで行く年代」の参加に頼もしく、感謝して、おります。

★ また、シベリア抑留の記録をはじめ、実際に戦争に参加された方からの投稿が五編もあり、従来以上に迫力のある記録集になりました。

★ 何れの方々も本記録集を通して、戦争の悲惨さ、平和のすばらしさを語っておられます。

★ 二十一世紀こそ平和な世にしたいとの、全人類の思いとは別に、強者によるゴリ押しがまかり通っています。世界中に平和が訪れる日までこの集いを続けるつもりです。皆様のご協力をお願いします。

感謝 実行委員一同

戦時体験記録集（第十集）

編集・印刷・発行 戦争体験を語り継ぐ集い

発行年月日 平成十五年七月十二日

発行部数 百五十部